

〔特産化を目指したカキ新品種の栽培指針確立〕

カキ「東京紅」の良質な結果母枝を得るための予備枝の形質条件

菊池知古・馬場 隆

(園芸技術科)

【要 約】予備枝を残す判断基準は長さで表示でき、1年枝で11.0～20.9cm(または1.0～15.9cm)、2年枝で1.0～15.9cm(または1.0～10.9cm)の予備枝を残すことで良質な結果母枝が得られる。また、2年枝基部の不発芽2～3芽を有効利用できる。

【目 的】

東京都育成の新品種「東京紅」は、平成14年から穂木が都内生産者に試験配布され、一部の直売所などで販売が始まっている。今後、多くの直売所で販売されることが予想され、安定した収量確保が必要となる。本品種は約30～60cmの結果母枝から、比較的高品質な果実が得られる(平成19年度成果情報)。本試験ではこのような良質結果母枝を計画的に確保するための予備枝の形質条件を明らかにする。

【方 法】

場内灰色低地土圃場の「東京紅」8樹を供試した。予備枝の調整は2007年および08年の剪定時に行い、翌年の剪定前に予備枝から発生した新梢(結果母枝)の調査を行った。切除部分を先端に、1～3節目に発生した新梢の本数および新梢長とその基部径を測定した。

【成果の概要】

- 1) 慣行に準じ剪定した予備枝は、同じ予備枝長に対し1年枝と2年枝では後者の方が基部径が太かったが、いずれも基部径と長さの関係はほぼ正比例し、予備枝を残す基準は視覚的に判断しやすい「長さ」を利用出来ることが分かった(図2)。
- 2) 予備枝の枯死率は1年枝の1.0～5.9cmで3割にもおよんだが、総数が多いことから利用可能な予備枝は全体の約半数あった。頂芽優勢から、予備枝の先端より1～3節の順に上位ほど新梢は長く、また予備枝が長い(太い)ほど新梢も長い傾向であった(表1)。
- 3) 07, 08年ともに、1年枝では11.0～20.9cm、2年枝では1.0～15.9cmの予備枝に、約30～60cmの結果母枝となる新梢が高い確率で発生することが示唆された(表1・図3)。
- 4) 実測値をみると、約30～60cmの結果母枝となる新梢を発生させた予備枝は、1年枝で1.0～15.9cmの長さの場合が多く、予備枝が長くなるほど1, 2, 3節目と発生節位が下がった。2年枝では1.0～10.9cmの長さの場合が多かった(図4)。1年枝では発生した新梢の3割未満であったが、2年枝では3割以上であった(データ未記載)。
- 5) 以上の結果から、慣行に準じ通常の手順で剪定した場合、予備枝を残す判断基準は長さで明示でき、1年枝では11.0～20.9cm、2年枝では1.0～15.9cmの長さの予備枝を残すことで、良質な結果母枝の発生が可能なが示唆された。しかし、それだけの長い予備枝を残せる基部径の太い枝は絶対数が少ないと予想され、1年枝では1.0～15.9cm、2年枝では1.0～10.9cmの予備枝を残すことで実用的に良質な結果母枝が得られる。

また、一般的には剪定時に切除する、1年間結果母枝として利用した2年枝の、基部の不発芽2～3芽を有効利用できることが明らかになった。

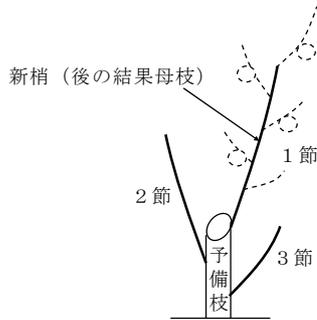


図1 予備枝および新梢（結果母枝）のイメージ

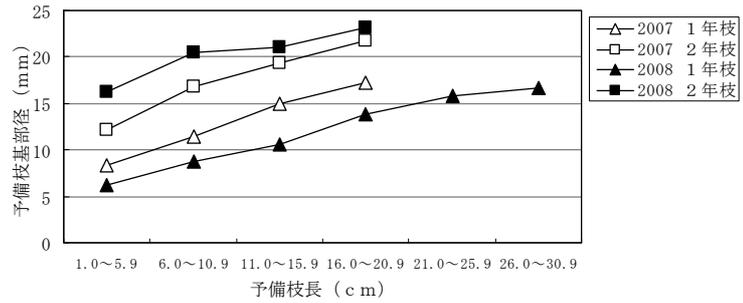


図2 予備枝の長さおよび基部径の関係

表1 予備枝に用いた枝の状況と予備枝の枯死率、新梢長の関係

年枝	予備枝				発生新梢長 (cm)			
	長(cm)	平均径(mm)	総数(本)	枯死率(%)	利用可能数	1節	2節	3節
1	1.0~5.9	7.3	320	33	214	24.8	18.0	9.9
	6.0~10.9	10.1	151	6	142	41.2	27.8	20.9
	11.0~15.9	12.8	46	1	45	62.3	44.6	30.3
	16.0~20.9	15.6	27	0	27	72.2	50.8	38.3
	21.0~25.9	14.3	13	0	13	87.1	70.7	37.5

2	1.0~5.9	14.2	36	8	33	42.0	36.4	48.5
	6.0~10.9	18.7	45	5	43	56.3	46.1	31.0
	11.0~15.9	20.3	12	0	12	66.5	34.4	34.8
	16.0~20.9	22.4	5	0	5	65.5	75.3	26.4

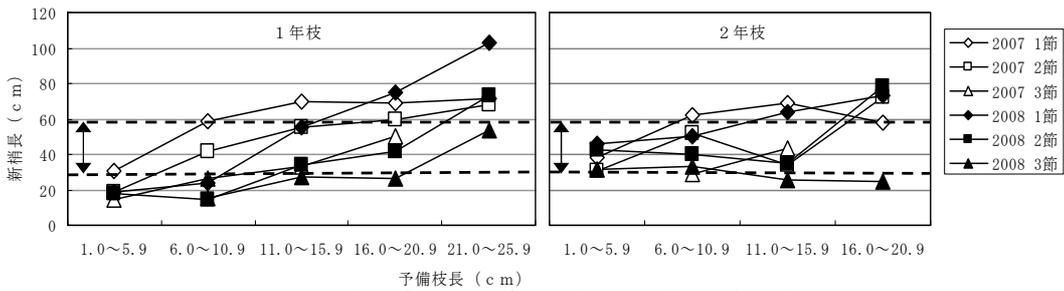


図3 予備枝長および新梢が発生した節位と新梢長の関係 (◀▶ 良質結果母枝)

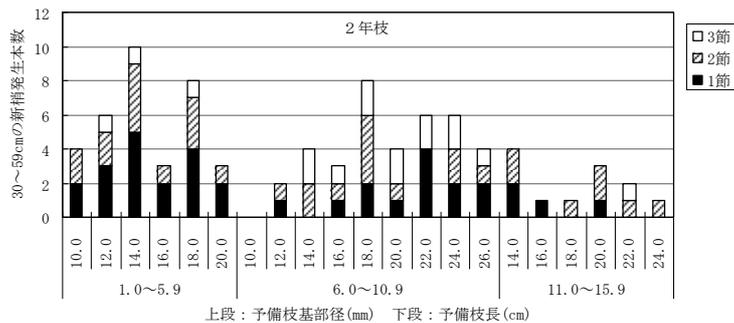
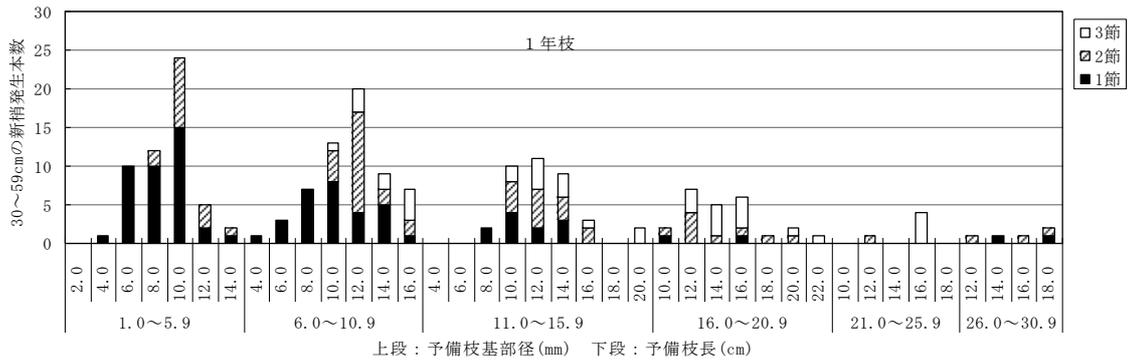


図4 良質結果母枝となる30~59cmの新梢発生状況